

土門拳記念館(山形県酒田市)



久しぶりに酒田を訪ね、土門拳記念館に立ち寄ってみた。開館した時以来なので、三十五年ぶりになる。市街地から四キロほど離れた記念館の周辺は整備が進み、駐車場からのアプローチも樹木が大きく茂り、隣には大きな体育館が建築されようとしていた。

この三十五年の間に写真はデジタルに変わり、真実を写し出すはずの「写真」は、加工された「画像」に置き換えられていった。この日は、修学旅行と思われる中学生が多く、メモを取りながら鑑賞していたが、産まれた時からデジタルフォト世代に、土門拳の「写真」は伝わるのか関心を持って眺めた。

カメラが生まれて百八十年。フィルム（銀

塩）からデジタルへの転換は、真実を写すと書く「写真」の意味を大きく変え、高度な技術と高価な機材を要した撮影も、簡単にできるようになり、プロ、アマの区別も曖昧になって、混沌とした変革期にあるのだ。

土門拳の時代は、露光の設定やピントもまだ自動化されず、フィルムの感度は低く、代表作「古寺巡礼」の撮影では、ひたすら現場で被写体を見つめ、納得できる光の差し込む瞬間を待ち続けたという。「絶対非演出の絶対スナップ」のリアリズム論に基づき「ヒロシマ」、「筑豊のこどもたち」などを制作した写真への信頼感は、誰よりも強かった。「写真は、肉眼を超える」と認識していた土門は、

現在のデジタル全盛の時代をどう捉えるだろうか。

スマホでの手軽な撮影は、日常的になった。撮られた「画像」は加工され発表するのが一般的で、「写真」の意味は薄くなるばかりだ。光学的に、技術的にも行き着くところまできたのだ。

土門拳記念館には、七万点の作品が所蔵されている。これからは修学旅行の中学生のうちに、古典を鑑賞するような感覚になるかもしれない。「写真」が「画像」に移り変わり、プロとアマの違いもなくなって、混沌と時代になっていく。土門拳は、アナログの時代に活躍して幸福だったのだ。